

題目弥陀名号勝劣事

文永元年 四三歳

南無妙法蓮華經と申す事は唱へがたく、南無阿弥陀仏、南無薬師如来など申す事は唱へやすく、又文字の数の程も大旨は同じけれども、功德の勝劣は遙かに替はりて候なり。天竺の習ひ、仏出世の前には二天三仙の名号を唱へて天を願ひけるに、仏世に出でさせ給ひては仏の御名を唱ふ。然るに仏の名号を二天三仙の名号に対すれば、天の名は瓦礫のごとし、仏の名号は金銀・如意宝珠等のごとし。又諸仏の名号は題目の妙法蓮華經に対すれば、瓦礫と如意宝珠の如くに侍るなり。

然るを仏教の中の大小権実をも弁へざる人師などが、仏教を知りがほにして、仏の名号を外道等に対して如意宝珠に譬へたる經文を見、又法華經の題目を如意宝珠に譬へたる經文と喩への同じきをもて、念仏と法華經とは同じ事と思へるなり。同じ事と思ふ故に、又世間に貴しと思ふ人の只弥陀の名号計りを唱ふるに随つて、皆人一期の間、一日に六万遍・十万遍など申せども、法華經の題目をば一期に一遍も唱へず。或は世間に智者と思はれたる人々、外には智者氣にて内には仏教を弁へざるが故に、念仏と法華經とは只一なり。南無阿弥陀仏と唱ふれば、法華經を一部よむにて侍るなど申しあへり。是は一代の諸經の中に一句一字もなき事なり。設ひ大師先徳の釈の中より出でたりとも、且は觀心の釈か、且はあて事かなんぞ心得べし。

法華經の題目は過去に十萬億の生身の仏に値ひ奉りて、功德を成就する人、初めて妙法蓮華經の五字の名を聞き、始めて信を致すなり。諸仏の名号は外道・諸天・二乗・菩薩の名号にあはすれば、瓦礫と如意宝珠の如くなれども、法華經の題目に対すれば、又瓦礫と如意宝珠との如し。当世の学者は法華經の題目と諸仏の名号とを功德ひとしと思ひ、又同じ事と思へるは、瓦礫と如意宝珠とを同じと思ひ一と思ふが如し。止觀の五に云はく「設ひ世を厭ふ者も下劣の乗を翫び、枝葉に攀附し狗作務に狎れ、獼猴を敬ひて帝釈と為し瓦礫を崇めて是明珠なりとす。此の黒闇の人、豈道を論ずべけんや」等云云。文の心は設ひ世をいとひて出家遁世して山林に身をかくし、名利名聞をたちて一向に後世を祈る人々も、法華經の大乗をば修行せずして、権教下劣の乗につきたる名号等を唱ふるを、瓦礫を明珠などと思ひたる僻人に譬へ、聞き悪道に行くべき者と書かれて侍るなり。弘決の一には妙樂大師、善住天子經をかたらせ給ひて、法華經の心を顯はして云はく「法を聞きて謗を生じ、地獄に墮するは恒沙の仏を供養する者に勝る」等云云。法華經の名を聞きてそしる罪は、阿弥陀仏・釈迦仏・薬師仏等の恒河沙の仏を供養し、名号を唱ふるにも過ぎたり。されば当世の念仏者の念仏を六万遍乃至十万遍申すなど云へども、彼にては終に生死をはなるべからず。法華經を聞くをば千中無一・雜行・未有一人得者など名づけて、或は抛てよ、或は門を閉ぢよなど申す謗法こそ、設ひ無間大城に墮つるとも、後に必ず生死は離れ侍らんずれ。同じくは今生に

信をなしたらばいかによく候なん。

問ふ、世間の念仏者なんどの申す様は、此の身に法華經などを破する事は争でか候べき。念仏を申すも、とくとく極樂世界に参りて法華經をさとらんが為なり。又或は云はく、法華經は不淨の身に叶ひがたし、恐れもあり。念仏は不淨をも嫌はねばこそ申し候へなんど申すはいかん。答へて云はく、此の四・五年の程は世間の有智無智を嫌はず、此の義をばさなんめりと思ひて過ぐる程に、日蓮一代聖教をあらあら引き見るに、いまだ此の二義の文を勘へ出ださず。詮ずるところ、近来の念仏者並びに有智の明匠とおぼしき人々の、臨終の思ふやうにならざるは是大謗法の故なり。人ごとに念仏申して、淨土に生まれて法華經をさとらんと思ふ故に、穢土にして法華經を行ずる者をあざむき、又行ずる者もすて念仏を申す心は出で來たるなりと覺ゆ。謗法の根本此の義より出でたり。法華經こそ此の穢土より淨土に生ずる正因にては侍れ。念仏等は未顕眞實の故に淨土の直因にはあらず。然るに淨土の正因をば極樂にして、後に修行すべき物と思ひ、極樂の直因にあらざる念仏をば淨土の正因と思ふ事僻案なり。淨土門は春沙を田に蒔きて秋米を求め、天月をすて水に月を求むるに似たり。人の心に叶ひて法華經を失ふ大術、此の義にはすぎず。

次に不淨念仏の事。一切念仏者の師とする善導和尚・法然上人は、他事にはいわれなき事多けれども、此の事にをいてはよくよく禁められたり。善導の觀念法門經に云はく「酒肉五辛を手にとらざれ、口にかまざれ。手にとり口にもかみて念仏を申さば、手と口に悪瘡付くべし」と禁め、法然上人は起請を書いて云はく「酒肉五辛を服して念仏申さば予が門弟にあらず」と云云。不淨にして念仏を申すべしとは当世の念仏者の大妄語なり。

問うて云はく、善導和尚・法然上人の釈を引くは彼の釈を用ふるや否や。答へて云はく、しからず。念仏者の師たる故に、彼がことば己が祖師に相違するが故に、彼の祖師の禁めをもて彼を禁むるなり。例せば世間の沙汰の彼が語の彼の文書に相違するを責むるが如し。問うて云はく、善導和尚・法然上人には何事の失あれば用ひざるや。答へて云はく、仏の御遺言には、我が滅度の後には四依の論師たりといへども、法華經にたがはゞ用ふべからずと、涅槃經に返す返す禁め置かせ給ひて侍るに、法華經には我が滅度の後、末法に諸經失せて後、殊に法華經流布すべき由、一所二所ならず、あまたの所に説かれて侍り。随つて天台・妙楽・伝教・安然等の義に此の事分明なり。然るに善導・法然、法華經の方便の一分たる四十余年の内の未顕眞實の觀經等に依つて、仏も説かせ給はぬ我が依經の讀誦大乘の内に法華經をまげ入れて、還つて我が經の名号に対して讀誦大乘の一句をすつる時、法華經を抛てよ、門を閉ぢよ、千中無一なんど書いて侍る僻人をば、眼あらん人は是をば用ふべしやいなや。疑つて云はく、善導和尚は三昧發得の人師、本地阿彌陀仏の化身、口より化仏を出だせり。法然上人は本地大勢至菩薩の化身、既に日本国に生まれては念仏を弘めて、頭より光を現ぜり。争でか此等を僻人と申

さんや。又善導和尚・法然上人は、汝が見る程の法華經並びに一切經をば見給はざらんや。定めて其の故是あらんか。答へて云はく、汝が難ずる処をば世間の人々定めて道理と思はんか。是偏ひとえに法華經並びに天台・妙樂等の実教実義を述べ給へる文義を捨て、善導・法然等の謗法の者にたばらかされて、年久しくなりぬるが故に思はする処なり。先づ通力つうりきある者を信ぜば、外道・天魔を信ずべきか。或外道は大海を吸ひ干し、或外道は恒河を十二年まで耳に湛たへたり、第六天の魔王は三十二相を具足して仏身を現ず。阿難尊者、猶魔と仏とを弁わへず。善導・法然が通力いみじしというとも、天魔外道には勝れず。其の上仏の最後の禁いましめに、通を本とすべからずと見えたり。

次に善導・法然は一切經並びに法華經をばおのれよりも見たりなんどの疑ひ、是又謗法の人のためには、さもと思ひぬべし。然りといへども、如来の滅後には先さきの人は多分賢きに似て、後の人は大旨ははかなきに似たれども、又先の世の人の世に賢き名を取りてはかなきも是あり。外典にも、三皇・五帝・老子・孔子の五經等を学びて賢き名を取れる人も、後の人にくつがへされたる例ためし是多きか。内典にも又かくの如し。仏法漢土に渡りて五百年の間は明匠めいしょう 国に充滿せしかども、光宅こうたくの法雲・道場の慧觀等には過ぎざりき。此等の人々は名を天下に流し、智水を国中にそゞぎしかども、天台智者大師と申せし末すえの人、彼の義どもの僻事ひがごとなる由を立て申せしかば、初めには用ひず。後には信用を加へし時、始めて五百余年の間の人師の義どもは僻事と見えしなり。日本国にも仏法渡りて二百余年の間は、異義まちまちにして、何れを正義とも知らざりし程に、伝教大師と申す人に破られて、前二百年の間の私義は破られしなり。其の時の人々も当時の人の申す様に、争いかでか前々の人は一切經並びに法華經をば見ざるべき。定めて様こそあるらめ、なんど申しあひたりしかども叶はず。經文に違ひたりし義どもなれば終に破れて止やみにき。

当時も又かくの如し。此の五十余年が間は善導の千中無一、法然しゃへいかくほうが捨閉閣抛の四字等は、権者の釈なればゆへこそあらんと思ひて、ひら信じに信じたりし程に、日蓮が法華經の或あくは惡世末法時、或おは於後末世、或りょうぼうくじゅうは令法久住等の文を引きむかへて相違をせむる時、我が師の私義破れて疑ひあへるなり。詮せんずるところ、後五百歳の經文の誠なるべきかの故に、念仏者の念仏をもて法華經を失ひつるが、還つて法華經の弘ませ給ふべきかと覺ゆ。但し御用心の御為に申す。世間の悪人は魚鳥鹿等を殺して世路を渡る。此等は罪なれども仏法を失ふ縁とはならず。懺悔ざんげをなさざれば三惡道にいたる。又魚鳥鹿等を殺して売買をなして善根を修する事もあり。此等は世間には悪と思はれて遠く善となる事もあり。仏教をもて仏教を失ふこそ、失ふ人も失ふとも思はず。只善を修すると打ち思ひて、又そばの人も善と打ち思ひてある程に、思はざる外に惡道に墮いつる事の出で来候なり。当世には念仏者なんどの日蓮に責め落とされて、我が身は謗法の者なりけりと思ふ者も是あり。聖道の人々の御中にこそ実の謗法の人々は侍はべれ。彼の人々の仰せらるゝ事は、法華經を毀そしる念仏者も不思議なり。念仏者を毀る日蓮も奇怪なり。念仏と

法華とは一体の物なり。されば法華經を読むこそ念仏を申すよ、念仏申すこそ法華經を読むにては侍れと思ふ事に候なりと、かくの如く仰せらるゝ人々、聖道の中にあまたをはしますと聞こゆ。随つて檀那も此の義を存じて、日蓮並びに念仏者をおこがましげに思へるなり。先づ日蓮が是程の事をしらぬと思へるははかなし。

仏法漢土に渡り初めし事は後漢の永平なり。渡りとゞまる事は唐の玄宗皇帝開元十八年なり。渡れるところの經律論五千四十八卷、訳者一百七十六人。其の經々の中に、南無阿弥陀仏は即ち南無妙法蓮華經なりと申す經は、一卷一品もおはしまさゞる事なり。其上、阿弥陀仏の名を仏説き出だし給ふ事は、始め華嚴より終はり般若經に至るまで、四十二年が間に所々に説かれたり。但し阿含經をば除く。一代聴聞の者は是を知れり。妙法蓮華經と申す事は、仏の御年七十二、成道より已來四十二年と申せしに、靈山にましまして無量義処三昧に入り給ひし時、文殊・弥勒の問答に、過去の日月灯明仏の例を引いて「我見灯明仏乃至欲説法華經」と先例を引きたりし時こそ、南閻浮提の衆生は法華經の御名をば聞き初めたりしか。三の卷の心ならば、阿弥陀仏等の十六の仏は、昔大通智勝仏の御時、十六の王子として法華經を習ひて、後に正覺をならせ給へりと思へたり。弥陀仏等も凡夫にてをはしませし時は、妙法蓮華經の五字を習ひてこそ仏にはならせ給ひて侍れ。全く南無阿弥陀仏と申して正覺をならせ給ひたりとは見えぬ。

妙法蓮華經は能開なり。南無阿弥陀仏は所開なり。能開所開を弁へずして南無阿弥陀仏こそ南無妙法蓮華經よと物知りかほに申し侍るなり。日蓮幼少の時、習ひそこなひの天台宗・真言宗に教へられて、此の義を存じて数十年の間ありしなり。是存外の僻案なり。但し人師の釈の中に、一体と見えたる釈どもあまた侍る。彼は觀心の釈か。或は仏の所証の法門につけて述べたるを、今の人弁へずして、全体一なりと思ひて人を僻人に思ふなり。御景迹あるべきなり。念仏と法華經と一つならば、仏の念仏説かせ給ひし觀經等こそ如来出世の本懐にては侍らぬ。彼をば本懐ともをばしめさずして、法華經を出世の本懐と説かせ給ふは、念仏と一体ならざる事明白なり。其上多くの真言宗・天台宗の人々に値ひ奉りて候ひし時、此の事を申しければ、されば僻案にて侍りけりと申す人は多し。敢へて証文に經文を書いて進ぜず候はん限りは御用ひ有るべからず。是こそ謗法となる根本にて侍れ。あなかしこあなかしこ。

日 蓮 花 押